

Title	東京歯科大学広報 第318号 2025年06月30日発行
Journal	東京歯科大学広報(318)
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10130/6832">http://hdl.handle.net/10130/6832</a>
Right	
Description	

# 東京歯科大学広報



## 学長就任式



第13代学長に片倉 朗教授就任

## 第13代学長に片倉 朗教授が就任

2025年5月31日をもって任期満了を迎える一戸達也学長の後任の学長選任は、学校法人東京歯科大学寄附行為に定められた手続きに従い、2025年3月25日(火)開催の第773回講座主任教授会の推挙を受け、2025年3月28日(金)の第756回理事会にて、片倉 朗教授の新任が決定した。任期は2025年6月1日から2028年5月31日までの3年間である。



▶井出吉信理事長より辞令を交付された片倉学長

### 片倉 朗学長 経歴

#### 【生年月日】

1960年 8月 10日生

#### 【学歴】

1979年 3月 駒場東邦高等学校卒業  
 1979年 4月 東京歯科大学入学  
 1985年 3月 東京歯科大学卒業  
 1985年 4月 東京歯科大学口腔外科学第一講座特別研究生入学  
 1986年 3月 東京歯科大学口腔外科学第一講座特別研究生修了  
 1986年 4年 東京歯科大学大学院歯学研究科(口腔外科学第一講座専攻)入学  
 1991年 2月 東京歯科大学大学院歯学研究科(口腔外科学第一講座専攻)修了(歯学博士)

#### 【資格・免許】

1985年 5月 第77回歯科医師国家試験合格  
 1985年 6月 歯科医籍登録(第97207号)  
 1991年 2月 歯学博士の学位受領(東京歯科大学)  
 1993年 7月 日本口腔外科学会 認定医(第527号)  
 1993年 10月 日本口腔外科学会 専門医(第527号)  
 1998年 10月 日本口腔外科学会 指導医(第527号)  
 2002年 9月 共用試験実施機構 OSCE 歯学系分科会 認定評価者(第31号)  
 2003年 1月 ICD 制度協議会インフェクションコントロールドクター(OP 0047号)  
 2003年 1月 千葉県麻薬施用者免許(歯第 A107号)  
 2006年 12月 日本救急医学会認定 ICLS コース修了(コース認定番号 0616021)  
 2008年 3月 American Heart Association BLS コース修了(Healthcare Provider)  
 2008年 6月 日本老年歯科医学会 認定医(第202号)  
 2008年 7月 日本がん治療医認定医機構 暫定教育医(歯科口腔外科 098154号)  
 2009年 7月 厚生労働省「がん診療に携わる医師に対する緩和ケア研修会」修了(第22号)  
 2009年 9月 東京都麻薬施用者免許(第1-563号)  
 2010年 5月 (社)医療系大学間共用試験実施評価機構共用試験 歯学系 OSCE 外部評価者(第214号)  
 2012年 1月 日本老年歯科医学会 専門医・指導医(第4号)(第4号)  
 2012年 1月 日本口腔診断学会 認定医・指導医(第211号)(第094号)

2012年 12月 日本口腔腫瘍学会暫定口腔がん 指導医(第13077号)  
 2012年 12月 日本顎顔面インプラント学会 指導医(214号)  
 2014年 9月 日本有病者歯科医療学会 専門医・指導医(第202号)(第214号)  
 2016年 1月 日本顎関節学会 暫定指導医(第11号)  
 2016年 11月 日本口腔科学会 認定医・指導医(第1-16085号)  
 2019年 10月 日本口腔内科学会 専門医・指導医(第40号)(第16号)  
 2022年 4月 日本口腔顔面神経機能学会 認定医(第114号)  
 2023年 1月 日本小児口腔外科学会 指導医(第0129号)  
 2024年 10月 日本顎変形症学会 認定医・指導医(口腔外科)(第0127号)(第0097号)

#### 【職歴および研究歴】

1991年 4月 東京歯科大学口腔外科学第一講座 助手 (2000年5月まで)  
 2000年 6月 東京歯科大学口腔外科学第一講座 講師 (2006年3月まで)  
 2003年 6月 学命によりアメリカ合衆国下記に研究留学  
 University of California Los Angeles, School of Dentistry  
 Dental Research Institute (Oral and Maxillofacial Surgery, Oral Biology Research Laboratory),  
 Head and Neck Surgery, School of Medicine Visiting Assistant Professor (2004年7月まで)  
 2006年 4月 東京歯科大学口腔外科学講座 講師(講座統合による名称変更)  
 2008年 2月 東京歯科大学大学院歯学研究科がんプロフェッショナル養成プランコーディネーター  
 2008年 6月 東京歯科大学口腔外科学講座 准教授  
 2009年 9月 東京歯科大学口腔健康臨床科学講座口腔外科学分野 准教授(配置転換)  
 2011年 4月 東京歯科大学オーラルメディスン・口腔外科学講座 教授、講座主任 (2015年3月まで)  
 2011年 5月 東京歯科大学口腔がんセンター センター長 (2012年8月まで)  
 2013年 6月 東京歯科大学教務部 副部長  
 2015年 4月 東京歯科大学口腔病態外科学講座 教授、講座主任  
 東京歯科大学水道橋病院口腔外科 部長  
 東京歯科大学教務部 部長  
 2016年 4月 東京歯科大学水道橋病院 病院長・管理者就任  
 2019年 6月 東京歯科大学 副学長・千葉歯科医療センター長  
 2022年 6月 東京歯科大学 副学長・千葉歯科医療センター長  
 2025年 6月 東京歯科大学 学長

## 齋藤 淳短期大学学長が就任

2025年5月31日をもって任期満了を迎える鳥山佳則短期大学学長の後任の学長選任は、学校法人東京歯科大学寄附行為に定められた手続きに従い、2025年3月27日(木)開催の第159回短期大学教授会の推挙を受け、2025年3月28日(金)の第756回理事会にて、齋藤 淳教授の選任が決定した。任期は2025年6月1日から2028年5月31日までの3年間である。

▶井出吉信理事長より辞令を交付された齋藤短期大学学長



## 新人事発令

2025年4月22日(火)開催の第758回理事会において、寄附行為施行細則第3条に規定する役職者が選任された。

副学長には山本 仁教授が再任され、山下秀一郎教授が新たに選任された。水道橋病院長には田口円裕教授、市川総合病院長には菅 貞郎教授が選任され、千葉歯科医療センター長代行には山下教授が選任された。大学院歯学研究科長には阿部伸一教授が選任された。任期は2025年6月1日から

2028年5月31日までの3年間である(定年退職者は当該日まで)。なお、東京歯科大学短期大学副学長には、菅野亜紀教授が選任された。

新役職者の就任に伴い、2025年6月2日(月)午後1時より水道橋校舎本館応接室において井出吉信理事長より寄附行為規定による新役職者に対して辞令が交付された。



▲井出吉信理事長と寄附行為規定役職者の集合写真





## ■ 学長就任のご挨拶



学長 片倉 朗

2025年6月1日から13代目の学長を拝命いたしました片倉朗です。どうぞよろしくお願いたします。

ただ今、井出吉信理事長より新たな学務役職者のご紹介と本学の課題についてお話をいただきました。これらの課題は多くは学務に関連することです。法人と連携をとりながら、教員ならびに職員の皆様のご協力をいただきまして、大学運営の務めを果たし、本学のさらなる発展に努めてまいります。

私は進学(教養)過程を旧市川校舎、第3学年を旧水道橋校舎で過ごし、1985年に千葉校舎で卒業しました。当時の口腔外科第一講座に入局後は旧水道橋病院(現在の前のレンガ造りの建物)でも診療に携わり、大学院修了後は千葉校舎で診療・教育・研究に従事しました。2009年に現在の水道橋病院、そして2011年には市川総合病院でオーラルメディスン・口腔外科学講座の講座主任、口腔がんセンター長、また大学院の「がんプロフェッショナル養成プラン」の運営に携わりました。2015年から現在の口腔病態外科学講座の講座主任となり、水道橋病院と千葉歯科医療センターの運営を担いました。3キャンパスの変遷を経験し、それらの施設での仕事で様々な知識を得ることができました。そして何よりそこで多くの教職員の方々との繋がりを持つことができました。各施設の皆

様と一緒に仕事をさせていただいたこと、そして金子 譲学長、井出吉信学長、一戸達也学長のもとで学務に携わらせていただいた上で与えられた職責だと思っております。

学長の職務にあたっては、これらの経験と人との繋がりを活かして、日頃から大学全体を俯瞰的に見ることを第一に、多くの方の協力をいただきながら課題に取り組み、問題を解決して大学の発展に繋げてゆく所存です。

さて、4月から私立学校法の改正が行われ大学運営の体制が大きく変わりました。しかし、高等教育機関である大学の使命が、「教育」、「研究」、「社会貢献」、歯科大学では社会貢献の一環が「診療」であることに変わりはありません。今回の私立学校法改正では、学校法人の責務を「私立学校は自主的にその運営基盤の強化を図るとともに、その設置する私立学校の教育の質の向上及び運営の透明性の確保を図るよう努めなければならない」と新たに第24条で規定し、5年以上の期間を対象とした中期計画の策定を義務付けています。東京歯科大学では一戸前学長のもと、2032年までの中期計画を既に策定しています。私の大きな責務の1つはこの中期計画に掲げられた目標を1つずつ達成に近づけることです。

「教育」では、「患者中心の医療を実践できる、人間性豊かで、自分で問題発見と解決ができ、かつ創造性に富む人材を

育成する」ことを中期計画に掲げています。2027年から18歳人口が顕著な減少傾向を示します。優秀な入学者の確保を行い、3ポリシーに基づいたきめ細かな教育を各学生に提供し、本学の卒業生の質の担保を維持することが必要です。しかし、入学者の学力差や倫理観の変化、共用試験導入によるコア・カリキュラムや国家試験出題基準の改訂、さらに教員の先生方の世代交代も顕著な時期となり、解決しなければならない多くの課題があります。現在の学生の修学状況を見ますと、これまでと同等の卒業生の質の担保するためには早々に教育環境の再整備を教養系の先生方や職員の方と一丸となって講じなければならない時だと思っております。もちろん、教育ワークショップなどのFDの開催も必要ですが、その一方で学生教育にあたる教職員の方の負担も増えてきています。教職員の方が良質な教育を提供できる就労環境も合わせて検討しなければなりません。

「研究」では口腔科学研究センターを拠点としたプロジェクト研究が大きな成果をあげています。今年5月に行われたプロジェクト研究の外部評価委員会では著名な委員の先生方から運営と成果のいずれにも高い評価をいただきました。これを継続しつつ、成果の一部を産学連携で発展させて社会実装に繋がりたいと思います。現在の「ウェルビーイングプロジェクト」は今年度で終了ですので、次年度以降のプロジェクト研究のテーマも検討しなければなりません。当初より成果として社会実装による社会貢献性が想定でき、かつ学内全体で取り組めるテーマを検討したいと思います。

科研費をはじめとした外部の競争的資金の獲得も大きく伸びてきました。特にスタートアップや若手研究で獲得する先生が増えました。各講座においてはさらに内外の競争的研究費を積極的に獲得していただいて、基礎系・臨床系を問わず各講座・研究室でも独自の研究を進展させ、次世代の講座を担うことができる若手研究者・指導者の育成に努めていただきたいと思います。研究部を中心に皆様のご意見をうかがい、ご協力もいただいて、これらの推進に努めたいと思います。

そして「診療」についてです。本学の3つ医療施設はそれぞれその目的が異なっています。もちろん、大学に附属する施設ですので、教育機関の医療施設としての責務を念頭におき、地域の先導的な役割を果たす医療で地域に貢献し、「歯科医師たる前に人間たれ」を基本に医療人の育成にも努めていただきたいと思います。保健医療政策ビジョンである「保健医療2035」にも謳われていますが、今や国民は自分に必要な医療を選んで受療する時代です。各診療領域においては、ぜひとも高次の医療施設として患者さんにアピールできる、そして選択してもらえ診療内容を展開して発信していただきたいと思います。もちろん、3施設の相互チェックも含めて引き続き医療安全対策・感染予防対策には最大限の注力をお願い致します。日々変化する経済情勢にも柔軟に対応

し、医療スタッフと事務スタッフの連携によって適切な勤怠管理と収益性も考慮し、安定した病院・センターの運営を目指していただきたいと思います。これらは臨床研修の先生方を含めた歯科医師と医師、またすべての事務方を含めた医療スタッフの皆様の協力なくして成し得ないことですので、どうかよろしく願いいたします。

以上の「教育」「研究」「診療」のいずれにおいても、「口腔機能発達不全症」「口腔機能管理」「口腔機能低下症」という言葉に代表されるように、現在の歯科医師は患者さんの生涯にわたる口腔機能の管理によって地域社会の健康長寿を担うことが責務となっています。特に歯科医師、歯科衛生士、歯科技工士の皆様には「歯科」ではなく「口腔科」、「歯科医療」ではなく「医療の中の一分野として口腔領域を担う医療」、「医科歯科連携」ではなく「疾病治療のための診療協力」といった概念をもっていずれにも取り組んでいただくことが、今後も本学が歯科界でリーダーシップをとるためには必要であると思っています。

そして、これらのいずれにも共通して付け加えたいことは「グローバル化」と「女性のキャリアアップ」の推進です。学生の海外研修、本学からの海外留学、海外からの留学生の受け入れ、海外施設との共同研究など、国際交流部を中心としてグローバル化に積極的に取り組んでまいります。各講座・部門におきましても、独自に海外との研究協力など国際的な活動に力を入れていただきたいと思います。現在、本学の学生は半数が女性です。卒業後も本学で歯科医師として、また教員としても長く働けるキャリアプラン、同様に女性の職員の方も本学でやりがいを感じて働けるキャリアパスの検討も法人と連携して進めたいと思います。

多くのことを述べましたが、実は私立歯科大学は総合大学に比べると入学者選抜から文部科学省などからの補助金や研究費に至るまで、非常に狭いストライクゾーンで勝負をしなければなりません。ストライクの判定をもらうには何事にも精度の高い立案とその成果が必要です。井出理事長をはじめとした法人役員の皆様のご指導をいただきながら、山本 仁副学長・山下秀一郎副学長とともに学務において目標の実現に尽力いたします。

最後になりますが、本学の学則には「人類の福祉に貢献することを目的とする」と記載されています。また、校歌には「人なり、道なり」「父なり、友なり、全き家なり」と謳われています。今一度、「歯科医師たる前に人間たれ」を学内全体で職種に関係なく共有し、校歌のごとく皆さんと一緒に「ヒューマニズムに富んだ人材育成と社会貢献」を目標に歩んでいきたいと心から思っています。大学に関わるすべての皆様にご協力をいただきますことを心よりお願いをして、私の本日の挨拶とさせていただきます。

(2025年6月2日(月)開催の学長就任式でのご挨拶より)

## 学務役職者就任のご挨拶



副学長

山本 仁

この度、2025年6月1日付で副学長を拝命いたしました。重任となりますが、あらためて責任の重さを感じ、身の引き締まる思いです。本学135年の歴史は、前例の踏襲から成り立っているのではなく、改革の積み重ねによって成り立ったものと考えております。大学を取り巻く、日々刻々と変化する社会情勢に対して前例に囚われずに対応して本学が前進し続けるよう努めます。よろしく願いいたします。

歯学部入学から臨床実習、歯科医師国家試験、臨床研修、さらに生涯研修までの一貫した継ぎ目のない歯科医師養成という考えに基づき、制度や法律が改正されました。特記すべきこととしては、歯科医師法が改正され、歯科医師免許を持たない学生の臨床実習での医療行為が法的に担保されました。それに伴い、臨床実習前に実施される共用試験が公的化され、国家試験のような扱い、つまり全国共通の基準で合否が判定されることになりました。このような制度の変化には各学年でのより質の高い、きめの細かい修学の対応が求められます。また最近では人間関係や倫理観について戸惑う学生が増えてきているように思えます。学修面においても、生活面においても、学生にとって大切なもの、必要なものを考えながら、片倉 朗学長のリーダーシップのもと、山下秀一郎副学長とともに教務部、学生部、各学年の学年主任・副主任、そのほか関連各部署と情報を共有し、的確に対応して参ります。

本学のさらなる発展と充実のため、教職員の皆様、同窓の皆様、保護者の皆様のご指導、ご鞭撻とご協力を賜りますようお願い申し上げます。



副学長  
千葉歯科医療センター長代行  
大学事務局長

山下 秀一郎

この度、2025年6月1日付をもちまして、副学長に就任いたしました。伝統ある本学の副学長を拝命することは、改めて身に余る光栄でありますと共に、その責任の重さを痛感しております。私はこれまで水道橋病院病院長として、医療情報システムの改善、教育病院としての充実した学修プログラムの策定、さらに、地域医療連携の構築などに従事してまいりました。この経験は、副学長としての責務にも十分活用できるものと自負しております。

歯学部学生の学修は、文部科学省が定める「歯学教育モデル・コア・カリキュラム」を骨格としています。最新版の基本的な理念には「2040年以降の社会も想定した資質・能力」が挙げられています。これは、急激な人口減少や高齢化率の上昇が予想されるなか、これまでとは異なる歯学教育が必要と判断された上で掲げられた理念です。特に特徴的なのは「IT：情報・科学技術を活かす能力」の項目の追加です。人工知能(AI)やビッグデータといったデジタル技術を根付かせ、人口動態の大きな変化に対応できる高度科学技術を活用する時期となってきました。

本学の歯学部教育では、すでにシミュレーターの活用、臨床現場のライブ体感、先端医療機器の体験などを取り入れております。このような技術は日進月歩であり、今後は活用範囲のさらなる拡大が必須となります。一方では、情報・科学技術を取り扱う際に必要な倫理観やデジタルプロフェッショナルリズムの基本的原則への十分な理解が必要となります。そのためには、大学全体の教職員の意識改革を常に心がけていくことが肝要であると感じております。

本学の建学理念である「歯科医師たる前に人間たれ」は全職員に確実に浸透しております。IT化が加速する昨今において、改めてこの建学理念の重要性を感じております。山本 仁副学長とともに片倉 朗学長を支えながら、大学全体が一丸となって同じ方向に前進できるよう尽力してまいります。今後とも、変わらぬご指導ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。



水道橋病院長

田口 円裕

2025年6月1日付で、水道橋病院の病院長を拝命いたしました。水道橋病院は、1900年に本学の前身である東京歯科大学に隣接して開設された血脇歯科診療所に端を発します。創設以来120年以上の歴史と伝統を受け継ぎ、良質な医療の提供、優秀な歯科医師の輩出に貢献してまいりました。現在、水道橋病院は、最先端の施設・設備を取り入れた都市型拠点病院として、地域の高次医療機関、基幹的歯科病院として大きな役割を担っています。

水道橋病院は、『患者様に安心で満足のいく「思いやりの心による医療」を提供し、各医療機関との連携を密にした高次歯科医療を担うと共に、安全で質の高い医療を提供する』という理念のもと、安全かつ安心な医療の推進に努めて参りました。

この度、本院をさらに発展させるために、「患者さん中心の医療の実現」・「優れた医療人材の育成」・「職員の働きやすい環境づくり」・「地域医療との連携強化」・「経営基盤の強化」を目標として掲げました。こうした目標をこれまで以上に高い水準で実現していくために、全職員が一致団結して前進してまいります。

また、未来の歯科医療を担う歯学部学生、短期大学学生や研修歯科医をはじめとする医療従事者の育成にも力を入れており、高い倫理観と専門性を備えた人材育成に努めています。特に、歯学部学生は一定の技能と知識を習得したStudent Dentistとして診療チームに参加し研鑽を積んでおります。

地域社会の皆様、そして医療関係者の皆様との連携を強化し、本学の建学理念である「歯科医師たる前に人間たれ」の思いを持つ志高き医療人が心一つにして、患者さんを第一に心のこもった医療を展開し、未来の歯科医療を創造していきたいと思っておりますので、よろしく願いいたします。



市川総合病院長

菅 貞郎

この度、2025年6月1日付で市川総合病院病院長を拝命いたしました。昨今の病院経営をめぐる諸課題や、今後の市川総合病院の在り方を考えると、その責任の重さに身の引き締まる思いがいたします。理事長・学長をはじめとする関係各位、ならびに同窓の諸先生方のご指導を賜りながら、職責を全うすべく、誠心誠意努めてまいる所存です。何卒よろしくお願い申し上げます。

私の祖父は、東京歯科大学時代の本学に学び、東京・湯島で開業しておりましたが、1923年7月に郷里の秋田へ戻り開業いたしました。そのわずか2か月後、関東大震災が震災いたしました。もし祖父がそのまま湯島で開業を続けていたなら、私の人生も今とは違っていたかもしれません。

私自身は1982年に慶應義塾大学医学部を卒業後、脳神経外科医として研鑽を積んでまいりました。米国国立衛生研究所(NIH)への留学、慶應義塾大学医学部脳神経外科専任講師を経て、2002年より市川総合病院に奉職しております。臨床では主に脳卒中診療に携わってまいりました。

2010年からは、当時の安藤暢敏病院長の下で副病院長を拝命し、2013年から2022年までは西田次郎病院長の下で副病院長を務めました。その後2025年までは経営戦略責任者として病院経営に深く関わってまいりました。これまでの経験を生かし、病院経営の健全化に向けて尽力したいと思います。

「地域の中核病院として、多職種が連携し、良質で高度な全人的医療を提供する」という当院のミッションを堅持しつつ、歯科大学附属総合病院としての歯科医療への貢献と、歯学教育への関与を重視し、病院職員と一丸となって、こうした課題の克服に真摯に取り組んでまいります。

今後とも変わらぬご指導、ご支援を賜りますよう、何卒よろしくお願い申し上げます。



大学院歯学研究科長

阿部 伸一

2025年6月1日付で大学院研究科長を拝命致しました。大学院教務部長の澁川義幸教授、大学院学生部長の福田謙一教授、そして大学院歯学研究科関係の事務職員の皆様とともに職責を全うしたいと考えています。大学院教育の目標として、本学建学の精神「歯科医師たる前に人間たれ」という言葉を基盤に、「社会ニーズに応える広い視野と人間性を兼ね備えた人材の育成」を掲げたいと考えています。

本学は開校以来、国内外を問わず分野横断的に有機的な研究活動を行ってきた土壌があり、文部科学省の大型公的研究費の継続的な獲得、さらには「がんプロフェッショナル養成基盤推進プラン」への参画などを行いながら、歯科医学に関する多様な研究成果を生み出してきました。研究施設に関しては、全学共有の研究機器を口腔科学研究センターに設置し、外部からの研究者も受け入れながら、幅広い研究者がつながりを持てるような環境を整備しています。本学の長い歴史と環境下で学ぶ大学院生には、広範な歯科医学的知識、国際的・社会ニーズに応える広い視野、そして豊かな人間性が自然と備わります。そして卒業後は研究テーマに専門となるだけでなく、国際水準の研究指導能力を持つことができます。これらの事を踏まえ大学院歯学研究科では、3つのポリシーとして「アドミッションポリシー」「カリキュラムポリシー」「ディプロマポリシー」をまとめています。

今後も本学大学院は歯科医学研究への門戸を広く開き、質の高い研究を担う人材を集め、愛と研究マインドを有する人材を育成し、社会に貢献することを目指します。歴代研究科長のリーダーシップのもとに築かれた大学院歯学研究科の内容をしっかり継承し、さらに発展させるために皆様のご指導とご協力を賜りたくお願い申し上げます。



短期大学学長

齋藤 淳

この度、2025年6月1日付で短期大学学長を拝命いたしました。歴代学長が築かれた基盤を受け継ぎ、さらに発展させる機会をいただけたことを大変光栄に感じております。あわせて、その責務の重さに身の引き締まる思いでございます。

短期大学は、初代学長の石井拓男先生によって礎が築かれ、鳥山佳則先生のご指導のもと発展を遂げてまいりました。その伝統を継承しながらも、現代の歯科医療が求める知識と技術を学生たちに提供し、社会に貢献できる歯科衛生士ならびにその指導者を育成することが、私の使命であると考えております。

2001年に宮城高等歯科衛生士学院が日本初の3年制教育を開始するにあたり、私は教務部長として歯科衛生士教員とともに新しい教育体系の構築に携わる経験を得ました。仙台の一枚から始まった3年課程は、今や全国へと広がり、その過程に携われたことは私にとって大きな学びとなりました。志を高く持ち、日々の努力を積み重ねることが、大きな成果につながることを体験してまいりました。

短期大学では、教育のさらなる質の向上に努め、学生が主体的に学び、成長できる環境づくりに力を注いでまいります。また、国内外の教育機関との連携を深め、広い視野を持つ人材の育成も目指したいと思っております。

教職員が一丸となって教育の充実を図り、本短期大学をよりよい未来へ導くべく力を尽くす所存です。皆様の温かいご支援とご協力を賜りながら、新たな挑戦へと歩みを進めてまいります。今後ともどうぞよろしくお願い申し上げます。



短期大学副学長  
菅野 亜紀

2025年6月1日付で、短期大学副学長を拝命いたしました。大変光栄であると同時に、その責務の重大さに身の引き締まる思いがいたします。

私は2022年より教務部長として、主に教務分野において学修環境の整備、カリキュラムの見直し、教育の質保証に取り組んでまいりました。今後は副学長として、齋藤 淳短期大学学長のリーダーシップのもと、これまで以上に全学的な視点から大学運営に携わり、さまざまな課題の解決に努めてまいります。

短期大学は、前身である東京歯科大学歯科衛生士専門学校からバトンを引き継ぎ開学しましたが、来年4月には10年目の節目を迎えます。おかげさまで、定員確保や国家試験合格率100%の継続など、順調な歩みを重ねてまいりました。しかしながら、18歳人口の減少、首都圏における四年制大学・三年制短期大学・専門学校の混在、新設校の増加といった状況を鑑みますと、今後は一層の柔軟性と持続可能な体制が求められます。

このような状況の中で、私の使命は、教務部・学生部をはじめとする短期大学の教職員の皆様のご協力を得ながら、全学的な視点で意思決定や改善に関わり、学生一人ひとりが将来に希望を持って学び成長できる環境を整えていくことにあります。また、短期大学の運営に多大なるご支援をいただいている歯学部各講座の先生方、水道橋病院、市川総合病院、千葉歯科医療センターなどの医療機関の皆様とも連携を深め、短期大学のさらなる発展に力を注いでまいります。

まだまだ至らぬ点も多くございますが、短期大学副学長・教務部長としての責任を自覚し、誠実に職務を全うしてまいります。今後とも皆様方のご指導、ご鞭撻を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。



図書館長  
杉原 直樹

2024年4月に図書館長を拝命してからあっという間の1年間でしたが、この度、再度図書館長を拝命いたしました。伝統ある本学の図書館長という大役に身の引き締まる思いがありますが、精一杯の努力をしております。

この1年間で、地域連携への積極的参画として千代田区立図書館との連携協力(学部学生や短期大学学生を対象とした出張登録窓口開設、千代田区立図書館での教職員推薦図書展示)、研究力強化としてEndNoteの機関契約(今年度よりTDCアカウントを利用している者はEndNoteの最新版を無料で利用可能)を行ってきました。また、昨年より2025年度学術論文等の即時オープンアクセス義務化への対応を行っております。その他、さいかち坂校舎図書分館ゲートの更新、通年業務である学生のオリエンテーションや講義への対応、電子ジャーナル購読更新、文献検索講習会、EndNote説明会などを行っております。

現在、本学は3キャンパスそれぞれに図書館を配置しています。水道橋キャンパス(水道橋校舎本館図書館、水道橋校舎新館図書館、さいかち坂校舎図書分館)、市川総合病院図書分館、千葉校舎図書館の5か所です。これらについて、スタッフ8名が対応しています。また、毎月の新刊および寄贈による図書受け入れのための選択は、学内から選ばれた図書委員の先生方に選書という形で行っております。

「2030デジタル・ライブラリー」推進に関する検討会では、2030年の望ましい大学図書館による支援機能・サービスとして、

- 1) デジタルコンテンツを利用者がいつでもどこでもシームレスに利用できる統合的な利用環境の実現
  - 2) 研究者のニーズに沿った大学全体の支援体制を構築し、メタデータ付与やデータ公開の支援体制の整備
  - 3) オープンアンドクローズド戦略に基づく研究データの管理・公開・共有の実現
- の3つをあげています。

これらに対して、図書館職員および図書委員会の皆様と一緒に取り組んでまいりたいと存じます。また利用者のご意見やご要望を聞きながら今後の図書館業務の改善、向上に役立てていきたいと考えています。

図書館長として図書館の業務を通じ、本学の教育・研究・臨床の発展・向上に邁進してまいりますので、どうぞよろしくお願い申し上げます。



教務部長

松浦 信幸

この度、2025年6月1日付で教務部長を拝命いたしました。伝統ある本学において、教務の要職をお預かりすることとなり、身の引き締まる思いであると共に、教育を支える使命の重さを改めて痛感しております。これまでの教務部での経験は、5年前の教務副部長職にとどまり、いまだ浅学非才の身ではございますが、副部長の平田創一郎教授、服部雅之教授、関根秀志教授、高際 睦教授、渡辺 章教授、そして教務課スタッフと力を合わせ、誠心誠意その職責を果たしてまいる所存です。

本学は、創立以来130年以上にわたり、歯科医学教育・研究・臨床の各分野で数多くの優れた人材を育成・輩出し、社会に貢献してまいりました。変化の著しい現代においても、時代の要請を的確に捉え、不断の教育改革に取り組む姿勢は、本学の大きな特長であると感じております。

近年では、アクティブ・ラーニングの導入やICTを活用した授業展開に加え、論理的思考および問題解決能力の育成を目指した問題基盤型学修(PBL)、さらに地域包括ケアにおけるチーム医療を見据えた多職種連携教育など、さまざまな教育的挑戦を進めております。学生が自ら考え、学び、成長する力を身につけられるよう、教育の質を一層高めていくことが私たち教務部の大きな使命と考えております。

また、学生一人ひとりが自らの将来像を描き、希望を持って安心して学びに集中できる環境づくりにも努めてまいります。歯科医師や研究者としての専門性に加え、豊かな人間性や倫理観、他者への共感力を備えた医療人の育成を目指し、教務部・教務課スタッフが丸となって教育支援にあたってまいります。

教職員をはじめ、本学に関わるすべての皆様とともに、本学の教育がさらなる発展を遂げるよう尽力してまいります。今後ともご指導・ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます、略儀ながら就任のご挨拶とさせていただきます。



学生部長

松坂 賢一

2025年6月1日より学生部長を拝命いたしました。学生の大学での生活がより充実したものになるために、副部長には田坂彰規教授、池上健司教授、石塚洋一准教授、立木千恵講師、そして学生課職員と共に職務を果たしていく所存です。

学生が本学に入学したということは、医療人としての第一歩を踏み入れたわけです。医療に携わる者として、高い倫理観と人間性を備え、周囲との協調性を身につける必要があります。普段の大学生活による同学年でのコミュニケーションはもとより、クラブ活動や東歯祭などでの先輩、後輩との連携も人間形成の場になるものと考えます。学生部では、各学年の主任および副主任、そして各クラブの顧問や部長の先生方の協力を得ながら、学生の活動をサポートしていきます。

また、歯科医師に求められているものは人間性であるとともに、教養と専門の知識および技術であることは言うまでもありません。進級、卒業と国家試験合格という目標に向かっている学生は、第1、2学年はさいかち坂校舎、第3、4学年は水道橋校舎新館、第5学年は附属病院および千葉歯科医療センター、第6学年は水道橋校舎本館と新館で一步一步歯科医師になるために学んでいます。本学の教育の中核を担う教務部の先生方や教務課職員と連携して、限られたスペースの中でも学びやすい環境づくりを考えていきたいと思っております。

学生部長として学生の学修と大学生生活が充実するように務めてまいりますので、今後とも皆様のご支援を賜りますようお願い申し上げます。



研究部長

笠原 正貴

2025年6月1日付で、研究部長を拝命致しました。研究関係ではこれまでに、口腔科学研究センター所属の実験動物施設管理部長、ならびに東京歯科大学学会所属の学会部主任を務めてまいりました。これまでとは少し異なった立場から本学の研究部門を支えることとなりますので、副部長の佐々木穂高教授、大野建州教授をはじめ、口腔科学研究センター事務部門、そして周囲の方々に助けをいただきながら職務を全うしていきたいと考えております。

大学の3つの使命は「教育」、「研究」そして「社会貢献」であります。「大学は、学術の中心として、高い教養と専門的能力を培うとともに、深く真理を探究して新たな知見を創造し、これらの成果を広く社会に提供することにより、社会の発展に寄与するものとする」と教育基本法に定められております。「教育」と「研究」の両輪の成果が「社会の発展」に寄与するわけですから、大学の使命として、研究部門もけっして疎かにできず、さらなる充実を図っていかねばならない分野と考えます。以上から、本学の研究部門の支援を行うにあたり、口腔科学研究センター長の溝口利英教授をはじめとする関係の方々、また、引き続き主任を拝命した東京歯科大学学会部とも連携して、本学の研究を盛り上げていく所存です。とりわけ、次世代を担う若手研究者の研究マインド育成に注力していきたいと考えております。

今後とも、なお一層のご指導ご鞭撻を賜りますよう謹んでお願い申し上げます。

## 学長退任のご挨拶



一戸 達也

この度、2025年5月31日をもって学長を退任することとなりました。在任中は多くのご支援とご指導をいただき、誠にありがとうございました。

学長就任のご挨拶で、本学の目的である「歯学に関する専門の学術を教授研究すると共に、豊かな教養と高い人格を備えた人材を養成し、もって人類の福祉に貢献する」ことを実現するために、教育、研究、医療および社会貢献の面から行動していきたい、そしてこのために、高邁な理想を目指しながら毎日を一步一步着実に歩んでいきたいと述べました。

この3年間のうち、最初の1年間は新型コロナウイルス感染症が私たちの日常の活動にもさまざまな影響を与えていましたが、2023年5月に5類感染症に変更された後は、少しずつ従来の活動が戻ってきました。このような中で、学長として東京歯科大学の今後の方向性を見据えながら活動していくために、法人の中期計画を踏まえて、教育、研究、国際化、医療、社会貢献、教学マネジメントとガバナンスという

6つの大項目の中に、全体で26の具体的項目としての行動目標を設定した「各領域の戦略」をまとめました。教授会での合意を得た後、大学HPにも公表し、各部署の皆様と連携し、情報を共有しつつ大学運営にあたってきました。

この結果、この3年間で多くの分野で一定の成果を得ることができました。具体的な成果については大学HPで確認していただければと思います。もちろん、いまだ道半ばの項目もありますが、PDCAサイクルがきちんと機能して、近い将来に必ず成果を挙げられると確信しています。

本学が歯科界の、そして社会のリーダーであり続けるために、今後も国の施策や社会の趨勢をしっかりと把握しながら、すべての教職員が同じベクトルを持って活動していただければと願っています。

本学の今後のますますの発展と教職員の皆様のご活躍を祈念し、退任のご挨拶とさせていただきます。3年間ありがとうございました。



▲最終講義の様子(2025年5月19日)



▲最終講義後、第1学年学生とともに

### 略 歴

1981年 3月 東京歯科大学卒業  
1985年 1月 東京大学医学部付属病院分院麻酔部 医員(1985年12月まで)  
1985年 10月 東京歯科大学大学院歯学研究科(歯科麻酔学専攻) 修了  
1986年 1月 東京歯科大学歯科麻酔学講座 講師(1990年12月まで)  
1991年 1月 東京歯科大学歯科麻酔学講座 助教授(2004年3月まで)  
1992年 10月 Harbor/UCLA Medical Center 麻酔科 客員研究員  
(1994年3月まで)  
2002年 4月 東京歯科大学歯科麻酔学講座 教授(2025年5月まで)  
2010年 6月 東京歯科大学水道橋病院 病院長(2013年5月まで)

2013年 6月 東京歯科大学 副学長(2022年5月まで)  
2016年 6月 東京歯科大学千葉病院 病院長(2018年3月まで)  
2018年 4月 東京歯科大学千葉歯科医療センター センター長  
(2022年5月まで)  
2022年 6月 東京歯科大学 学長(2025年5月まで)  
2025年 6月 東京歯科大学 名誉教授(現在)  
2025年 6月 東京歯科大学 特任教授(現在)  
2025年 6月 東京歯科大学歯科医学教育開発センター 主任(現在)

## 副学長退任のご挨拶



松井 淳一

2025年5月31日をもちまして副学長を退任し退職いたしました。

私は2008年に本学外科教授・部長に着任し、2013年から6年間市川総合病院副院長を、2019年から6年間本学副学長を、そして2020年からは法人常務理事を務めさせていただきました。

私は慶應義塾大学医学部の出身ですが、本学の学祖たる高山紀齋と血脇守之助両先生が慶應義塾で福澤諭吉の薫陶を受け、2つの大学が深い関係を持ちながら歴史と伝統を重ねて来たことに思いを致しながら務めてまいりました。その間には東日本大震災や新型コロナ禍といった未曾有の災害もありましたが、大学、ならびに病院が一体となって乗り越えられたことは大きな感動でした。

私は、2008年着任以来、病院医療情報システム、がん診療、広報、手術室、内視鏡室などに携わりました。2010年1月の電子カルテ導入とその後2回の更新を確実に行うことができ、現在も安定して稼働しております。2008年には地域がん診療連携拠点病院の指定を受け、その後の更新認定もつつがなく進めてまいりました。広報ではホームページの刷新と充実の端緒を開き、患者さん向けと地域医療機関向けの

新規広報誌の発刊、市民向け公開講演会「市民のための健康講座」を開催しました。2014年には内視鏡室、そして2023年には薬物療法室をそれぞれ移転のうえ拡充し、内科・外科外来の環境整備と相談室の増設・充実にも関わりました。同時に歯科、口腔外科の先生方との連携、特に周術期等口腔機能管理に力を注ぎました。

外科では、着任当時手術件数は年間600件台でしたが、外科チームの頑張りのおかげで徐々に増加させて行き、2018年に初めて年間1,000件を超えることができました。2019年1月には100名を超える方々に祝っていただき祝賀会を開催できました。私は、この17年間精一杯、肝胆膵手術を中心に多くの方々とすばらしい仕事を成し遂げることができ、大変充実し幸せな年月を過ごさせていただきました。

このように在任中大過なく職責を果たせましたことは、ひとえに井出吉信先生、西田次郎先生はじめ大学ならびに市川総合病院の教職員の皆様方のご支援の賜と、心からの感謝とお礼を申し上げます。

最後に、本学のますますの発展ならびに教職員の皆さまのご健勝をお祈りして、退任、退職の挨拶とさせていただきます。



▲外科手術1,000件達成記念祝賀会での集合写真（2019年1月26日）



▲市川総合病院での松井教授最後の膵癌手術（2025年5月14日）

### 略 歴

1979年 3月 慶應義塾大学医学部卒業  
1979年 5月 慶應義塾大学医学部外科学教室  
1989年 1月 カナダ・トロント大学医学部消化器科留学（～1991年2月）  
1991年 4月 栃木県立がんセンター手術室 医長  
1999年 6月 大田原（現那須）赤十字病院 第1外科部長兼内視鏡センター長  
2004年 9月 慶應義塾大学医学部外科学教室 非常勤講師  
2006年 5月 さいたま市立病院 副院長兼外科部長  
2006年 9月 慶應義塾大学医学部 客員助教授（外科学）

2008年 11月 東京歯科大学市川総合病院外科学講座 教授  
2011年 4月 慶應義塾大学医学部 客員教授（外科学）  
2012年 4月 東京歯科大学市川総合病院 外科学講座主任教授  
2013年 6月 東京歯科大学市川総合病院 副院長  
2019年 6月 東京歯科大学 副学長  
2020年 6月 学校法人東京歯科大学 常務理事  
2025年 6月 済生会宇都宮病院 顧問  
東京歯科大学 名誉教授

## 市川総合病院長退任のご挨拶



西田 次郎

2025年5月末日をもちまして、任期満了に伴い市川総合病院長の職を退任いたしました。

1994年11月に約3年間の米国アリゾナ大学での研究生生活を終え、帰国すると同時に市川総合病院に赴任いたしました。その後、31年間もの長い年月を市川総合病院で過ごし任期を満了することができましたのは、水野嘉夫前理事長、井出吉信理事長をはじめとする法人、大学および病院の教職員の皆さんの支えがあったことと心から御礼を申し上げます。

顧みますと、専門分野の肝疾患を中心に外来、病棟で日常診療に明け暮れると同時に、内科および消化器内科の部長として、病院の屋台骨となるべき診療科をいかにして発展させられるか悩む日々を過ごしておりました。この間、私の研究分野である肝微小循環の基礎研究に関しては継続できず、この年になって時間を見つけて頑張るべきだったと後悔しております。

2010年6月からは副病院長を拝命いたしましたが、その翌年の2011年3月に東日本大震災が発生しました。市川総合病院に計画停電が実施されるといった大変な事態に遭遇

しましたが、停電と度重なる余震の中でも教職員が一丸となり、停電以外の時間帯には夜間や休日を問わず診療を行い続けたことは今となっては懐かしい思い出です。

2013年6月に市川総合病院長を拝命し、4期12年間、本学と市川総合病院の発展のために自身の能力の限界を感じながらも最善の努力を続けてきたつもりです。

在任中には様々な出来事がありましたが、何といたっても最大の出来事は2020年1月からの新型コロナウイルスのパンデミックです。地域中核病院としてその対応が困難な状況の中で、教職員には自身の健康に留意しつつも地域から病院に求められる役割から逃げることなく責務を果たそうとのメッセージを送り続けました。教職員全員の多大なるご理解、ご協力の結果として、7階東病棟に急遽設置したコロナ病棟は効率的また安全に運用され、病院全体に及ぶようなクラスターの発生も防ぐことができました。教職員が一致団結して新型コロナウイルスと闘う姿を目の当たりにし、市川総合病院のチーム力に感激するとともに個々の潜在的な能力とここぞという時の瞬発力はやはり高い集団だと改めて感じました。

6月より嘱託教員として、水道橋病院内科の特任教授・科長を拝命いたしました。今後も微力ながら大学および病院において皆様のお役に立てたらと思っております。

末筆になりますが、東京歯科大学の今後のますますのご発展と皆様のご健勝を祈念いたしまして、退任のあいさつとさせていただきます。



▲診察風景



▲診察風景

### 略 歴

1984年09月 長崎大学医学部卒業  
1985年05月 慶應義塾大学医学部内科 研修医  
1987年06月 東京歯科大学市川総合病院内科 助手  
1989年05月 慶應義塾大学医学部消化器内科 助手  
1991年07月 米国アリゾナ大学医学部解剖学講座留学  
1994年11月 東京歯科大学市川総合病院内科 助手  
1995年06月 東京歯科大学市川総合病院内科 講師  
1998年10月 東京歯科大学市川総合病院内科 助教授  
1999年04月 東京歯科大学市川総合病院内科 助教授・部長

2001年10月 東京歯科大学市川総合病院消化器内科 助教授・部長  
2001年11月 東京歯科大学市川総合病院消化器内科 教授・部長  
2010年06月 東京歯科大学市川総合病院 副病院長  
2012年04月 慶應義塾大学医学部 客員教授(内科学)  
2012年06月 東京歯科大学内科学講座 主任教授  
2013年06月 東京歯科大学市川総合病院 病院長  
2025年06月 東京歯科大学水道橋病院内科 特任教授・科長  
東京歯科大学 名誉教授

## 短期大学学長退任のご挨拶



鳥山 佳則

2025年5月末日をもって定年を迎え、5年余の短期大学学長の職を退きました。在職中のよかった出来事ベスト7を記します。

1つ目は、コロナパンデミックの中、重症の学生、職員が出なかったことです。学長に就任した2020年4月は、初の緊急事態宣言が出された時期であり、3か月間、学生が登校しない日々が続きました。散発的に感染者は出ましたが、クラスターの発生がなかったことが何よりの幸いでした。

2つ目は、歯科衛生士国家試験全員合格を継続できたことです。専門学校時代の第1回国家試験から通算して34回連続して全員合格を達成できたのは幸いでした。

3つ目は、定員割れをしなかったことです。少子化と4大志向という逆境下、しかも赤字基調の収支が続く中、入学定員の確保は必須であり、毎年、定員が確保できたのは幸いでした。

4つ目は、卒業生の教員採用です。学長任期中に少なくとも1名は採用したいと考えていましたが、在学中から成績、態度ともに申し分のない2名を採用できたことは幸いでした。

5つ目は、一教員として、短期大学3学年と専攻科、全学生に講義を担当できたことです。小規模で、学生とは心情的にも物理的にも距離感が近く、恵まれた教育環境下で教員を務めることができたのは幸いでした。

6つ目は、卒業式で一人ひとりに卒業証書を授与できたことです。当初は代表のみでしたが、卒業生が約50人であることから実現できたのは幸いでした。

最後の7つ目は、短大の教職員の皆さんと一緒に仕事できたことです。小さな所帯であるので、入学式や卒業式、オープンキャンパスなどの行事は全員参加となります。事前の準備から当日に至るまで、一人ひとりが、責任をもって役割を果たす様子には、感謝の念しかありません。このような教職員の皆さんと一緒に仕事できたことは、この上ない幸いでした。

結びに、短期大学、歯学部、法人の職員の皆さま、そして、在校生、卒業生に厚く感謝いたします。



▲学長最終講義後の様子



▲学生たちとともに

### 略 歴

1987年 3月 大阪大学歯学部卒業  
1987年 5月 厚生省入省  
本省勤務および静岡県、東京医科歯科大学、茨城県に外向  
2010年 6月 厚生労働省保険局歯科医療管理官  
2012年 9月 社会保険診療報酬支払基金本部歯科専門役  
2014年 1月 厚生労働省医政局歯科保健課長  
2016年 3月 厚生労働省退職

2016年 6月 東京歯科大学歯科医療管理学 教授  
2019年 4月 東京歯科大学水道橋病院 副病院長  
2020年 4月 東京歯科大学短期大学 教授・歯科医療管理学兼任  
東京歯科大学短期大学 学長  
2025年 5月 東京歯科大学短期大学 学長退職  
2025年 6月 東京歯科大学短期大学 嘱託教員・名誉教授

## 定年退職のご挨拶



微生物学講座

石原 和幸

2025年3月31日をもって東京歯科大学を退職いたしました。学部第3学年に微生物学講座で実験を始めてから、およそ44年間の研究生活になります。

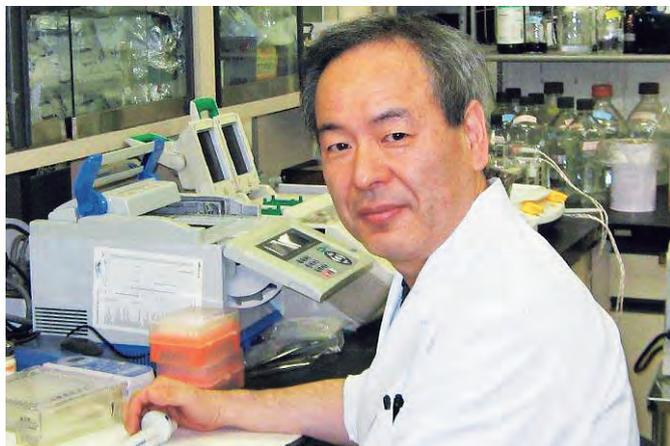
最初は、奥田克爾先生の指導のもと歯周病原細菌の病原因子解明のため遺伝子解析を始めました。当時、遺伝子については素人で、手探りで何とか *Treponema denticola* 遺伝子のクローニングに成功し、研究者としてやっていく見通しを得られました。その勢いで1992年から Howard K. Kuramitsu 教授のラボに留学し、テキサス州とニューヨーク州でポスドクとして円高のアメリカを堪能することができました。これを機会に帰国後も Kuramitsu 教授と共同研究を行うようになり、*T. denticola* の病原因子であるタンパク分解酵素

dentilisin などの遺伝子解明に成功するとともに、このつながりでスピロヘータの Gordon Research Conference にも参加するようになりました。この Conference ではスピーカーとして2回呼ばれ、研究の展開について発表する機会を得ました。

歯周病原性菌解析は、口腔細菌が全身に与える影響の解析へと広がり、心冠状動脈疾患、誤嚥性肺炎などに与える影響についてのエビデンスを示すとともに、マウスモデルにより歯周炎によってフレイルが引き起こされるというデータを得ることができました。

最初は単なるクローニングから始まったのですが、興味ある複数の研究へとプロジェクトが展開し、研究生活を楽しむことができました。私の“歯周病原細菌の病原因子を明らかにする”という単純なビジョンでもこの程度の研究成果を得られたことから、今後、本学の若い研究者の皆さんが、それぞれのビジョンを持ち、研究のトレンドを変えるデータを世界に発信することを期待しています。

これらの研究は多くの方々の協力により行われており、在任中に力を貸していただいた皆様に感謝します。



▲研究風景



▲若かりし頃、講座にて(後列左から2番目)

### 略 歴

1985年 3月 東京歯科大学卒業  
 1989年 3月 東京歯科大学大学院歯学研究科修了(微生物学専攻)  
 1989年 4月 東京歯科大学微生物学講座 助手  
 1992年 2月 学命によりアメリカ合衆国 Texas 大学 San Antonio Health Science Center に留学  
 1993年 7月 学命によりアメリカ合衆国 New York 州立大学 Buffalo 校に留学  
 1994年 4月 東京歯科大学微生物学講座 講師  
 1997年 10月 第9回 歯科基礎医学会賞(微生物学部門)受賞  
 2000年 5月 平成11年度 日本細菌学会黒屋奨学賞受賞  
 2002年 4月 東京歯科大学微生物学講座 助教授  
 2006年 3月 平成18年度 日本ワックスマン財団助成金受賞

2007年 4月 東京歯科大学微生物学講座 准教授  
 2007年 10月 2007年度 日本歯周病学会学術賞受賞  
 2008年 4月 東京歯科大学微生物学講座 教授  
 2013年 4月 口腔科学研究センター 所長  
 2025年 4月 東京歯科大学微生物学講座 客員教授  
 2025年 4月 東京歯科大学 名誉教授

### 現在就任中の委員など

- ・東京歯科大学学会理事
- ・日本細菌学会評議員
- ・歯科基礎医学会代議員
- ・日本歯周病学会理事



化学研究室

西川 慶一

この度、2025年3月31日をもちまして、定年退職となりました。無事に定年を迎えることができましたのは、ひとえに多くの先生方のご指導、ご助言、ご鞭撻、そして職員の方々のご支援があったることと、心より感謝申し上げます。

私は、1983年に東京歯科大学に入職し、約30年間歯科放射線学講座に在籍しました。その間、何度か第6学年の副主任を担当させていただき、生涯忘れることのできない多くの経験をさせていただきました。もっとも強く記憶に残っている思い出の1つは、学年主任を佐藤 亨先生(当時のクラウンブリッジ補綴学講座、現在は名誉教授)が、学年副主任を阿部伸一先生(解剖学講座)、笠原正貴先生(当時は歯科麻酔学講座、現在は薬理学講座)、上田貴之先生(当時は有床義歯補綴学講座、現在は老年歯科補綴学講座)、中澤妙衣子先生(当時は歯科保存学講座)、そして私が務めた第116期生についてのものです。第116期生の国試受験は、17名が不合格というとても残念な結果に終わりました。そのため、慰労会を兼ねた国試反省会の会場がホテルではなく、文字どおり反省を促す会として、学食になってしまいました。そして翌年度、不合格者17名中14名が聴講生になり、これに多浪

生(6、4、3、2浪生)4名を加えた18名を既卒者主任・副主任として担当することになりました。当時はグループ学習(今のグループ学修)がシステム化されていない時代で、グループ学習は有志によって実施されていました。新卒の聴講生は総合講義開始とともにグループ学習を始めましたが、多浪生はグループ学習を拒否し、各自で勝手に勉強していました。この状況は、多浪生が同じことを繰り返す可能性が大きいように思われました。そこで、主任・副主任で多浪生を説得し、新卒の聴講生の協力も得て、何とかグループ学習に仲間入りさせることができました。そして、聴講生全員で懸命に勉強した結果、何と18名全員が国試に合格しました。合格発表の日の喜びと感動は本当に忘れることができません。

その後、配置換えにより、2015年に化学研究室に異動し、主に第1学年の教育に携わるようになりました。それ以降、低学年のうちから理解型の学修法を身に付けさせること、すなわち「答えが言える」ではなく「説明できる」を習慣化させることを大きな目標として教育に携わってまいりました。これにより、第6学年副主任の折に遭遇した「勉強の仕方がわからない」と嘆く学生が減ったのであれば、うれしい限りです。

継承と発展には人材が必要不可欠です。これまでの私の働きが少しでも人材育成のお役に立っていたのであれば、この上ない喜びにございます。東京歯科大学の伝統のご継承と更なるご発展、そして皆様のご健勝を祈念いたしまして、定年退職のご挨拶とさせていただきます。



▲学食での国試反省会の様子(後方テーブル左から2番目)



▲最終講義を終えて

#### 略 歴

1983年 4月	東京歯科大学歯科放射線学講座 副手
1985年 4月	東京歯科大学歯科放射線学講座 助手
2007年 4月	東京歯科大学歯科放射線学講座 助教(職名変更)
2012年 4月	東京歯科大学歯科放射線学講座 講師
2015年 9月	東京歯科大学化学研究室 講師
2016年 7月	東京歯科大学化学研究室 准教授
2024年 10月	東京歯科大学化学研究室 教授
2025年 4月	東京歯科大学化学研究室 客員教授

#### 現在就任中の委員など

- ・日本歯科放射線学会代議員
- ・日本歯科放射線学会防護委員
- ・日本歯科放射線学会認定委員
- ・日本歯科放射線学会和文誌編集委員
- ・日本画像医療システム工業会標準化部会 SC-2206(歯科用X線装置)委員
- ・医療被ばく研究情報ネットワーク(J-RIME)主メンバー(日本歯科放射線学会)



広報部長：田坂 彰規  
広報副部長：大久保真衣